

# SHOW-HOMEシネマフルーツ

★★★★★

## アラビアのロレンス／完全版 4K (Lawrence of Arabia)

1962年／イギリス映画

配給：コロムビア／227分

2025（令和7）年4月20日鑑賞

TOHOシネマズ西宮OS

Data

2025-42

監督：デヴィッド・リーン

原作：トマス・エドワード・ロレン

ス『知恵の七柱』

出演：ピーター・オトワール／オマ

ー・シャリフ／アンソニー・

クイン／アレック・ギネス

### みどころ

グループA、Bに分けて、交互に選りすぐりの25本を届ける「午前十時の映画祭15」のトップは、『ベン・ハー』と『アラビアのロレンス』。両作とも約4時間の超大作だが、約60年ぶりの大スクリーン、大音響での鑑賞はまさに至福の時間だ！

1914年から18年まで続いた第1次世界大戦における「西部戦線」の激闘は、エーリヒ・マリア・レマルクの著書『西部戦線異状なし』(1929年)等で有名だが、中東方面で、イギリス陸軍の一士官が、なぜ“アラビアのロレンス”と呼ばれる活躍をしたの？彼の具体的な任務と功績は？

本作が公開された1962年当時は第2～第4次中東戦争の真っ最中だったが、中東情勢が難解で複雑なことは、現在のハマスVSイスラエル抗争を見ても明らかだから、本作の鑑賞については、しっかりした基礎勉強が不可欠だ。

本作前半に見る、アカバ攻略作戦は何のため？後半に見る、ダマスカス占領は何のため？アラブの服に身を包んだイギリス軍人たるロレンスが、なぜアラブ民族を率いてダマスカスを占領し、アラブ国民会議を実現させたの？中学時代には理解不十分だったそんな“あれこれ”を今回の鑑賞ではしっかり理解できたが、それと同時に、ロレンスの失意にも納得！退役後まもなく起きたバイク事故は、むしろ彼にとってラッキーだったのかも・・・？

■□■初鑑賞は中学時代に松山で！その完全版を約60年後に■□■

『ベン・ハー』(59年)に続いて、「午前十時の映画祭15」で『アラビアのロレンス／完全版4K』を鑑賞！そこで上映されるグループBの「選りすぐりの25本」は、次頁の表のとおりだ。私が同作を初鑑賞したのは、松山の中学時代に、父親に連れられた試写会での

ことだ。中学生の私には、「アラビアのロレンス」というタイトルに込められたイギリスの“二枚舌外交”、“三枚舌外交”的ことはよくわからなかつたが、冒頭でのオートバイ事故におけるロレンスの死亡から始まる、美しい砂漠の風景の中で繰り広げられる約4時間にわたる一大叙事詩は感動の一言だった。

本作後半のハイライトとなるダマスカスの地名は知っていたが、前半のハイライトとなるアカバについては、後にも先にも本作で初めて聞く地名だった。中学生当時の私が知っているアラブ（アラビア、中東）の知識といえば、「開けゴマ！」で有名な『アリババと40人の盗賊』くらいのもの。また、エジプトの女王「クレオパトラ」の物語や、アフリカ戦線でナチスドイツの戦車部隊を率いたロンメル将軍のことは知っていても、第一次世界大戦下における中東でのトルコ（オスマン帝国）とアラブ民族との戦いが、イギリスVSドイツの代理戦争の役割を担っていたことなど分かるはずもなかった。したがって、私の初鑑賞時における本作の理解は極めて薄っぺらいものだったが、それでもアカバの戦略的位置づけや、ロレンスが苦労して作り上げた「アラブ国民会議」のだらしなさ、そして何よりも、一時はアラブ民族の英雄となりながら、結果的には母国イギリスの三枚舌外交に翻弄され、退役直後の1935年5/13のオートバイ事故によって死んでしまったロレンスの失意は、しっかりと理解することができた。

そんな名作を、私はTV放送で何度も観てきたが、今回「午前十時の映画祭15」で上映されるのは、デヴィッド・リーン監督が、自ら1988年に再編集を行った完全版4Kだ。上映時間もオリジナル版は207分だったが、完全版4Kは追加収録まで行い227分になっている。そんな本作のはじまりは『ベン・ハー』と同じく、アレビアのロレンス「序曲」から。スクリーンは暗いままだが、序曲が終わる

上映期間	作品タイトル
4/4(金)～4/17(木)	ベン・ハー 4K
4/18(金)～5/1(木)	アラビアのロレンス/完全版 4K
5/2(金)～5/15(木)	八重田山 4K
5/16(金)～5/29(木)	ターミネーター2 4K
5/30(金)～6/12(木)	風と共に去りぬ 4K
6/13(金)～6/26(木)	ゴッドファーザー 4K
6/27(金)～7/10(木)	秒の器
7/11(金)～7/24(木)	羊たちの沈黙 4K
7/25(金)～8/7(木)	メリーポピンズ
8/8(金)～8/21(木)	天使にラブソングを…
8/22(金)～9/4(木)	エイリアン 4K
9/5(金)～9/18(木)	トップガン 4K
9/19(金)～10/2(木)	E.T. 4K
10/3(金)～10/16(木)	ローマの休日 4K
10/17(金)～11/6(木)	七人の侍 新4Kリマスター版 4K
11/7(金)～11/20(木)	ウエスト・サイド物語 4K
11/21(金)～12/4(木)	アマデウス(4Kレストア版) 4K
12/5(金)～12/18(木)	ニューシネマ・バラダイス
12/19(金)～2026/1/10(木)	シザーハンズ 4K
1/2(金)～1/15(木)	ショーシャンクの空に 4K
1/16(金)～1/29(木)	スタンドバイ・ミー
1/30(金)～2/12(木)	特許じかけのオレンジ 4K
2/13(金)～2/26(木)	2001年宇宙の旅 4K
2/27(金)～3/12(木)	バルブ・フィクション 4K
3/13(金)～3/26(木)	レオン 完全版

と、ロレンスがオートバイにまたがり疾走する冒頭のシークエンスに。そしてバイク事故による不慮の死を遂げると、次は葬式のシークエンスになる。そこで参列者が語るロレンス像は、「素晴らしい業績をあげたがよく知らない」、「英雄だが自己顕示欲にまみれた男」、「彼ほど偉大な人物はない」と毀譽褒貶相半ばしていたが、さて、眞のロレンス像は…?

## ■□すごい舞台と撮影で、すごいロレンス像をすごい新人が！ ■□■

今でこそ大スクリーンと大音響は当たり前だが、1960年代の70ミリの大スクリーンは特筆ものだった。また、砂丘といえば日本では鳥取砂丘が有名だが、私が2002年に観光した中国敦煌の砂漠はすごかったし、アラブ（中東）の砂漠はもっとすごいはずだ。中東のそれはあくまで想像上のものだが、それを70ミリの大スクリーンに映し出したのが、『戦場にかける橋』（57年）でアカデミー7部門に輝いたデヴィッド・リーン監督だ。

『週刊 20世紀シネマ館 No.10』（2004/4/1号、1963（昭和38年））は、本作について、「名匠リーンが“砂漠の英雄”を描いた美しくも壮大な映像叙事詩の最高傑作」、「70ミリの大画面に繰り広げられる砂漠のドラマ 異郷の地に人生を懸け、男は砂嵐や戦闘に立ち向かう」等の小見出しで、本作の素晴らしさを紹介している。そこでは「苛酷な条件下で撮影が敢行され大画面を駆使した映像美が完成」したことについて、次の通り紹介している。すなわち、

を設置。數ヶ月間にわたる炎天下での撮影を実行した。5台の70ミリカメラを含む機材の総額は1億8000万円。ヘリコプターや移動用車両を駆使して撮影は行なわれ、砂嵐や昼夜まで美しく描かれた壮大な映像が完成したのである。

62年にアメリカで公開された『アラビアのロレンス』は、大きな反響を呼び、62年のアカデミー賞では作品・監督・撮影賞をはじめ、7部門受賞の栄誉に輝いた。

監製も難かしく、波打つような砂丘がどこまでも続く……。70ミリの大画面に映し出される砂漠の荒涼たる美しさ。イギリスの名匠デヴィッド・リーンは、アカデミー賞7部門に輝いた『戦場にかける橋』（1957年製作）に統いて、この作品では砂漠を舞台に、悲しくも勇壮な男たちの物語を大スクリーンに駆ぎ出した。

リーンは、日中は50℃を超える、欧米人がひと夏を通してするのは不可能、といわれるヨルダンの砂漠に乗りこんだ。いちばん近い水場まで240kmという砂漠に撮影テント

他方、本作の主人公「アラビアのロレンス」ことイギリス陸軍中尉ロレンス役にデヴィッド・リーン監督が抜擢したのは、アイルランド生まれの無名の俳優ピーター・オトワール。1935年の退役直後にバイク事故で死亡したロレンスの評価が二分していることは前記のとおりだが、その点について、同誌は「相反する二つの性格を秘めた“奇人”ロレンスの描写」の見出しで、次のとおり紹介しているので、これにも注目！

## 『奇人口ひんぐを語れ』 相反する二つの性格を秘めた

第二次世界大戦時のイギリスの首相チャーチルは「ロレンスは現代で生んだもつとも偉大な人物である。一度と接のようない人が現れないだろう」と評した。

「今」、巨大な映像を舞台に纏うにされるロレンスの若辯は、單純な豪邁さではない。この「豪邁」は、内気であらがい、目立たないが、イギリス人その性質であらがいなど、勇猛な軍人としてアラブに生きる男、人命尊重を唱えながら、命懸命に命じることもある。相反する二つの性格を内に秘めた「昔、あるあるロレンス」、その恋愛や感情の分離を描いて、問題をめぐらす、自分のなのの窮屈に口をきかれてしまふ人間の性を、リーンは遺憾とした。

脚本を担当したのは、初めて映画の仕事を手がけたダギリスの脚作家ロバート・ホルト。ホルトは18ヶ月をかけて脚本を完成

させた。そして、英雄としてアラブの民の恩敵を務めるロレンスと、捕虜のすまいで、精神異常をきたし、ただの人に見に来つて「よくロレンスとおしゃべり、後半で明確に対比させたミ・ボルトは、みごとな構成に加えて、それぞれの登場人物の個性をしっかりと描き込み、操作を生んだのである。

「かつて演じられたことのない、この複雑な主人公を演ずるのは、これまで観客に知ら



以上のとおり、すごい舞台とすごい撮影で、すごいロレンス像をすごい新人が！

## ■■■第1次大戦下の中東情勢は？英国VSドイツの狙いは？■■■

本作が制作公開された1962年当時は中学生だったが、中東では第2次～第4次中東戦争の真っ只中だった。その当時はスエズ運河をめぐる攻防が有名だったが、2025年の今はガザ地区をめぐるハマス VS イスラエルの対立が激化している。そのことから分かるように、中東問題は複雑で、日本人には容易に理解できない。

第2次世界大戦は1939年9月のナチスドイツによるポーランドへの電撃侵攻によって始まったが、第1次世界大戦は、1914年6/28に発生した「サラエボ事件」によってオーストリア＝ハンガリー帝国の帝位継承者フランツ・フェルディナント大公夫妻の暗殺事件から始まった。第1次世界大戦は、主としてロシア+フランス+イギリス VS ドイツの戦いだったが、本作が描くように、多くの部族が群雄割拠していた当時のアラブは、イギリスとトルコ（オスマン帝国）との間で揺れていた。ところが、第1次世界大戦の始まりと共に、トルコ（オスマン帝国）はドイツ側についたから、スエズ運河を通じて植民地であるインドへの道を確保していたイギリスは大変なことに。1960年代の第2次～第4次中東戦争でも、イギリスにとってスエズ運河の確保は至上命題だったが、第1次世界大戦下でも、スエズ運河を失えばインドへの道を閉ざされるから、イギリスは大ピンチに！そこで、まずは情勢把握のために、イギリス陸軍エジプト基地勤務の地図作成課少尉のロレンスが、

アラブへ派遣されることに。彼の任務は、中東情勢の把握という抽象的なものだが、その狙いが、オスマン帝国からの独立闘争を指揮するファイサル王子（アレック・ギネス）と会見してイギリスへの協力を取り付ける工作任務であることは明らかだった。なるほど、なるほど。

そんなストーリーだから、インターミッション（休憩）までの本作前半 2 時間半で、ロレンスと関わってくるアラブ側の主要な人物は、

- ①ハリト族の族長でありながら、カイロで英語を学んだという進歩的な考え方を持つ男アリ（オマー・シャリフ）
  - ②オスマン帝国からの独立闘争を指揮する、王家の血筋にあたるファイサル王子（アレック・ギネス）
  - ③それまで幾多の戦いに勝利してきた勇者で、ハウエイタット族を率いる族長のアウダ・アブ・タイ（アンソニー・クイン）
- の 3 人だから、その役割やキャラをしっかりと把握したい。

## ■■港湾都市アカバを攻略せよ！その狙いは？方法は？■■

日本は狭い国土を鉄道と新幹線、そして高速道路が縦横無尽に走っているし、国際線、国内線の空路も網の目のように張り巡らされている。しかし、広いアラブ（中東）には、カイロやダマスカス等の有名な都市もあるが、町や村は少なく、基本的に砂漠の国だ。したがって、そこでの交通手段はもっぱらラクダ。ラクダは 20 日間くらいは水を飲まないでも生きていけるそうだが、そんなラクダを乗りこなすのは大変だ。

最初の任務に就いたロレンスは、案内人であるベドウィン族の男と共に初めてラクダに乗って砂漠の旅に挑んだが、アリによって案内人が殺されると、1 人でファイサルの基地があるヤンブーまでたどり着いたから大したものだ。それはともかく、到着したロレンスを迎えたのは、ファイサル王子の軍事顧問をしているイギリス陸軍のブライトン大佐（アンソニー・クエイル）だ。トルコ軍（オスマン帝国）からの攻撃を受け続けているファイサル王子は、ブライトン大佐がアドバイスするとおり、南へ逃走せざるを得なかつたが、ファイサル王子らとの話し合いの中で、ロレンスが思いついた作戦がアカバ攻略作戦だ。

オスマン帝国が占拠する港湾都市アカバには、立派な砲台が備え付けられていたが、その方向はすべて紅海に通じるアカバ湾に向けたものだった。つまり、アカバの内陸側（砂漠）からの攻撃は全く想定していなかったため、もしアカバを内陸側（砂漠側）から攻めたら、その攻略はたやすいはず！ そう考えたのはロレンスだけではなかったが、ロレンスの奇人たるゆえんは、「普通の人は砂漠の横断ができなくても、ボクならできる」と考え、それを実行に移そうとしたことだ。そんなロレンスの考えに驚いたのは、ハリト族の族長として砂漠を誰よりも知っているアリ。アリですら不可能だと思っている、砂漠横断による内陸側からのアカバ攻略作戦を、イギリス人軍人のロレンスがやるというのだから、アリが驚いたのは当然だ。

紅海に通じるアカバ湾に向けて砲台を据え付けた港湾都市アカバは、第1次世界大戦開始と同時にドイツと組んだトルコ（オスマン帝国）が支配する戦略拠点。例えて言えば、日露戦争におけるロシアの旅順要塞のようなものだ。したがって、海側からアカバを攻めれば、イギリスの艦船は砲台からの砲撃で次々と沈没させられてしまうが、逆に内陸側からアカバを攻めれば、その守備兵はゼロに等しいから、攻撃側は小部隊でもほぼ無抵抗でアカバ市内に突入することができる。したがって、少しの戦闘でアカバの占領が可能だ。そんなアカバ攻略作戦を実行に移すことができたのは、アラブ民族のアリが持っていた「砂漠を移動してアカバまで到達することなど不可能」という常識にとらわれず、「俺ならできる」と判断したロレンスの特異な才能だ。もっとも、人間の飲む水を携帯するだけで、ラクダに飲ませる水ではなく、水なしでのラクダの生存期限ギリギリの20日間で、砂漠を移動しアカバまで到着する作戦は一種のカケ（バックチ？）だ。

本作前半に見る“死のロード”とも言うべき砂漠移動のストーリーは、美しく素晴らしい風景と相まって見応え十分だ。その上、延々と続く砂漠の夜間行軍中、ガシムという男が列にいないことに気づいたロレンスは、「戻って助けに行く」と主張したから、アレレ。アリは「無茶だ」「死にに行くのか」と抗議したが、それを無視してただ一人、今来た道を戻つていったロレンスは、ガシムをラクダに乗せて合流してきたからすごい。その結果、アリはイギリス軍人のロレンスを称賛したため、ロレンスは以降、ロレンス1人だけのアラブ部族を認め、白く美しいアラブ民族衣装を身につけることに。

## ■ロレンスアカバ占領の戦略的価値は？英國の新アラブ戦略は？■

ロレンスが立案した、あまりにも突飛なアカバ攻略作戦にアリが驚いたのと同じように、ロレンスからその作戦を聞いたハウエイタット族の族長であるアウダ・アブ・タイが驚いたのは当然だ。“死の砂漠”を移動してきたロレンスやアリにアウダ・アブ・タイが初めて会見したのは、アカバ近くでアウダ・アブ・タイが勢力を保持している地域内でだが、アウダ・アブ・タイは当時オスマン帝国軍に協力していたから、イギリスによるアカバ攻略作戦と聞けば、それに反対すべきが当然だ。ところが、「アラブ独立のため」というファイサル王子の言葉には動かされなかったものの、ロレンスの「アカバには有り余る金銀財宝がある。アカバを攻略すればそれは取り放題だ。」との言葉に魅かれたアウダ・アブ・タイは、それまでの態度を一転して急きよアカバ攻略作戦に協力することに。ロレンスの発案による、アウダ・アブ・タイ率いるハウエイタット族を中心とするアラブ軍による内陸側からのアカバ奇襲作戦の実行は、1917年7/6のことだ。大砲をすべて海側に向けていたアカバはあっけなく陥落したが、イギリスにとってのその戦略的価値の大きさは？

他方、占領したアカバの司令部には、紙幣はどっさり蓄えられていたものの、金貨は1枚もなかった。そのため、これに怒ったアウダ・アブ・タイは紙幣をばらまくわ、通信設備をぶつ壊すわの狼藉に及んだから、アレレ、アレレ。ロレンスはそんなアウダ・アブ・タイの無知さに驚きつつ、イギリス国王の名において10日後に大量の金を与える旨の証文

を書いたが、そもそもその効力は？さらに、通信設備が破壊された今、やむなくアカバ占領を自らの口で報告すべく、アラブ人の2人の少年の召使いを伴って、カイロにあるイギリス軍の司令部に向かうことに。ロレンスが自分自身で再び砂漠を横断してカイロにあるイギリス軍のエジプト基地まで戻ろうとしたのは、最優先課題としてアカバの占領を口頭で伝えるためだ。しかし、アカバ攻略を現実に実行したのはアウダ・アブ・タイ率いるハウェイタット族を中心とするアラブ民族で、イギリス人はロレンス一人だけだから、ロレンスがそれを報告しても、イギリス陸軍上層部はそれを信用してくれるの？

そんなロレンスをアラブ民族のトルコ（オスマン帝国）からの独立闘争に活用すればドイツと戦う祖国イギリスにとって大いに有利。そう考えたのは、新たに司令官として赴任してきたエドモンド・アレンビー将軍（ジャック・ホーキンス）や、同じ考えを持つライデン顧問（クロード・レインズ）だった。そのため、上層部の意向を無視した独断専行行動にもかかわらず、アカバ攻略作戦の成功が認められたロレンスは少佐に昇進。さらにはイギリス陸軍から大量の兵器の補充を受けながら、アラブ民族を率いてオスマン帝国への新たな攻撃を開始することに。その主たる任務はヒビジャーズ鉄道の線路に爆弾を仕掛け、機関車を爆破した上で、アラブ部隊が猛襲（略奪？）するというものだ。オスマン帝国のヒビジャーズ鉄道を次々と爆破し、輸送物をアラブ民族による好き放題の略奪に委ねるというロレンスの戦法は各地で成功を収め、アラブの服を身につけたロレンスの活躍は、新聞記者ジャクソン・ベントリー（アーサー・ケネディ）の写真を添えた新聞記事によって広く世界に知れ渡ることになったが・・・。

## ■□■彼の苦悩は？タスマヤス占領の意義は？その欺瞞性は？■□■

中東方面に地理カンのない日本人には、広大なアラブの砂漠を縦横無尽に移動するロレンスの狙いを正確に理解するのは難しい。とりわけ、“ある事情”によって鉄道爆破作戦を中止したロレンスを心配するアリに対して、「私は透明人間だ」と言いながら、現地人に化けてある町の視察に入ったロレンスが、たちまちオスマン帝国軍に逮捕され、“拷問”を受けるシークエンスはわかりにくい。導入部でも、ロレンスの“変人奇人ぶり”は、マッチの火を自分の指で消す芸（？）で発揮されていたが、他方でそんなロレンスの変人奇人ぶりが、アカバ攻略作戦を成功させた最大の理由だったことは明らかだ。

そんなロレンスも、捕虜とされた後の屈辱的な扱いにはさすがに参ってしまったようで、アレンビー将軍に対して辞表を提出してしまうことに。ところがアレンビー将軍は辞表を受領せず、「サイクス・ピコ協定」の存在を知らせた上で、ロレンスをアラビアに送り返し、アラブ民族を率いてダマスカス侵攻の指揮を取らせたからすごい。ロレンスがその任務を引き受けたのは、イギリス正規軍よりも早くダマスカスを占領すれば、「アラブ人にアラブを与える」とアレンビー将軍が約束したためだが、それって本当に信用できるの？アリが「奴らは金のために働く殺人者だ」と警告するアラブ人の部隊も加えて、ダマスカス攻略に向かうロレンスの姿は、神がかり的なものになり、「マッチの火も熱いと思わなければ熱

くない」というロレンスの信念とおり、イギリス軍より一足早くダマスカスの占領を成し遂げることになったが、さてその意義は？その欺瞞性は？

## ■口■アラブ国民会議とは？その内実は？こりゃひどい！■口■

私は司馬遼太郎の小説が大好きだが、その中でも私のベスト1は『坂の上の雲』、ベスト2が『龍馬が行く』だ。『龍馬が行く』の前半は、若き日の自由な発想で独自に動き回る龍馬像が魅力的だが、後半の「船中八策」以降は、新政府樹立に向けた政権構想づくりに熱意を燃やす龍馬の発想力が興味深かった。一時的に失意に陥り、辞表まで提出したロレンスが、再びアラブ民族を率いてイギリス軍に先んじてダマスカス占領を成し遂げたのは、アレンビー将軍がロレンスに対して、「アラブ民族がダマスカスを占領すれば、アラブ人にアラブを与える」と約束したためだ。ところが、ロレンスが現実にそれを成し遂げ、アラブ人によるアラブ統治のための「アラブ国民会議」を招集してみると・・・。

日本の明治維新は長州、薩摩を中心とする下級武士（階級）を中心とする勢力によって成し遂げられたが、そこで特筆すべきは、革命派となった薩長の志士たちも、保守派となつた旧徳川幕臣たちも、原則的にみんな素晴らしい教養を身につけるとともに、新しい知識の吸収に熱意を燃やしていたということだ。それに比べると、ハウエイタット族のアウダ・アブ・タイをはじめとするアラブの族長たちの知識レベル、教養レベル（の低さ）は・・・？

他方、「アラブ民族（＝鳥合の衆）によるダマスカス占領を放っておけば、数日中に彼らは崩壊する」と予言したアレンビー将軍は、アラブ国民会議の混乱ぶりを横目に、「われ関せず」のスタンスを貫いたからすごい。電気や水道の供給、消防や治安の維持、医療の提供等は、臨時政府たるアラブ国民会議の最低限の義務だが、それらの面におけるアラブ国民会議の無能ぶり、無秩序ぶりが顕著になると・・・？ダマスカスの街から電灯が消え、水道が出なくなり、病院での治療ができなくなり、あちこちで火事が広がり始めると・・・？

イギリス軍に先んじてダマスカスを占領したにもかかわらず、アラブ国民会議のそんな体たらくに絶望したロレンスは、再びイギリス軍服を身につけ、帰国の挨拶のため司令部を訪れることに。そこに、イギリスとの政治交渉のためにやってきていたファイサル王子は、アラブのために戦ってくれたロレンスにねぎらいの言葉をかけたが、それは「我が友ロレンス、戦士の仕事はもうなくなった。取引は老人の仕事だ。」というものだったから、いやはや、政治の世界は何とも厳しいもの。逆に、ロレンスの“単純さ”は何をか言わんやだ。

2025（令和7）年4月28日記